

「子ども防災力トレーニングキャンプ」 ～判断力、行動力を身につける～

平成 24 年 12 月 22 日（土）～24 日（月）2泊3日



I 事業の背景（必要性）

平成 23 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生し、改めて子ども達への防災教育の必要性が提唱されており、学校以外で被災することを想定した避難訓練も充実させる必要がある。

そこで、青少年教育施設の特徴を活かし、災害での避難を想定した体験活動プログラムや避難後の生活を想定した避難所生活体験を取り入れた「体験型防災教育プログラム」の開発を目標に、本事業を実施した。

II 事業の概要

1. 趣旨

子どもたちに災害から身を守る力を身につけることが喫緊の課題となっていることから、講話や自ら考える場面を設定した実習等を通じて、防災に関する基本的な知識や技術を身に付けるとともに、適切な避難行動がとれるように判断力や行動力を高め、災害に対応する強い意志をはぐくむ。

2. 参加者

(1) 対象・募集人数

本事業の趣旨・内容に関心と意欲のある小学校 4 年生～6 年生 40 名

(2) 参加状況 参加児童数 41 名

<学年別参加児童数>

学年	男子	女子	合計
4 年生	8	7	15
5 年生	11	10	21
6 年生	1	4	5
合計	20	21	41

<地域別参加児童数>

地域	男子	女子	合計
御殿場	6	7	13
沼津	11	9	20
裾野	0	1	1
三島	0	1	1
静岡	1	1	2
藤沢	1	0	1
滋賀県	1	2	3

(3) 広報の方法

- ①募集チラシを作成（業者印刷）
- ②御殿場市・沼津市の小学校 4 年生～6 年生の全児童に配付
- ③静岡県裾野市・三島市・小山町・長泉町・清水町と神奈川県秦野市・南足柄市・山北町・松田町・箱根町と山梨県富士吉田市・都留市・山中湖村・富士河口湖町・忍野村の各小学校に 15 枚ずつ配付
- ④静岡県内の各市町教育委員会、山梨県と神奈川県の近隣教育委員会に広報を依頼
- ⑤HPに掲載
- ⑥静岡県内の地元新聞社に掲載依頼

3. 日 程

22日 (土)	10:15	11:00	12:00	13:30	15:30	17:00	18:00	19:30
	始めの会 オリエンテーション 自己紹介	災害と避難	宿舎移動 昼食	避難行動トレーニング①	ストレスの 低減方法	夕食	入浴	避難行動トレーニング②
23日 (日)	9:00	12:00	13:00	17:00	18:00	21:00		
	朝食	防災ラリー (煙ハウス, 火おこし, 防災クイズ, 寝床作り)				夕食	避難所生活トレーニング①	
24日 (月)	7:30	9:00	10:00	11:30				
	朝食	片付け	避難所生活 トレーニング②	まとめ (発表)	解散			

4. 内 容 (活動の様子)

(1) 「災害と避難」(講話) 講師: 宮城県南三陸町教育委員会 石澤 友基 氏

東日本大震災では、どのような災害が起きたのか、また、どのように避難したのかを聞くことにより、参加者の防災に関する意識を高めた。

(2) 「避難行動トレーニング」(講義・演習) 講師: 静岡県ふじのくに防災士 川口 聡 氏

日常生活における様々な場面での避難の仕方や、避難する時に気をつけることについて考えた。

- ・学校での避難訓練を思い出そう
- ・助けを求める方法
- ・家の中(リビングや自分の部屋)での危険箇所を見つけ出そう
- ・非常時に持ち出す物を考えよう
- ・避難するときに安全な道を探そう

(3) 「ストレスの低減方法」(講話・実習) 講師: 静岡大学教育学部准教授 小林 朋子 氏

日常生活のどのような場面でストレスがたまり、ストレスをどのように発散しているかを各自が振り返った。

その後、ストレスを低減する方法として、リラックス法があることが示され、リラックスするための簡単なストレッチや体操などを行った。

(4) 判断力, 行動力を養う「防災ラリー」講師: 国立中央青少年交流の家 職員

ラリーの各ポイントには、煙ハウス体験やダンボールを使った避難所作り、火おこしが必要な昼食作りなど、工夫と協力が必要な課題を設けた。制限時間内で多くの点数を獲得するために、グループがどのポイントをまわるかを相談して決定することや、各ポイントの課題を話し合っ解決する過程で、判断力と行動力が試される機会が多く設定されているという特徴がある。ラリー後には、グループごとに振り返りを行い、ラリーを通して学んだことで、災害時の避難で大切だと思ふことを考えて、発表した。

※ 煙ハウスの体験については、御殿場市・小山町広域行政組合 消防本部に協力いただいた。

※ ダンボールを使った避難所作りは、宮城県南三陸町教育委員会 石澤友基氏に協力いただいた。

(5) 「避難所生活トレーニング」(実習) 講師：国立中央青少年交流の家 職員

避難所での生活はどのようなものかを疑似体験した。

- ・ダンボールとレジャーマットを使用しての間仕切り，空間作り
- ・気温の低い中，毛布や寝袋を使用しての就寝
- ・非常食での食事

※ 非常食は，御殿場市危機管理室と大塚製薬株式会社より提供いただいた。

(6) 「避難所でできること～助けられる存在から助ける存在へ～」

講師：国立中央青少年交流の家 職員

宮城県気仙沼市の避難所で，実際に小学生が発行した「ファイト新聞」を紹介し，自分たちが避難所でできることについてグループで話し合い，全体で意見を発表した。

(7) まとめ(個人・グループ活動)

まず，個人でキャンプを振り返り，感想をグループ内で発表した。次に，キャンプで体験したことや学んだことを今後の生活に活かすために，「明日から頑張る目標」というテーマで一人一つ考え，輪になって発表した。

〈主な目標〉

- ・「家族を守りたい」…いざ災害に遭った時に家族が助かるように，キャンプで学んだことを家族に伝えたい。
- ・「リラックスの方法を家族に教えたい」…ストレスがたまった時に，少しでもストレスが低減できるように，キャンプで学んだリラックス法を家族に伝えたい。
- ・「困っている人がいたら助けたい」…災害時には避難所などで困っている人がいると思うが，日常でも困っている人がいたら，声を掛けて，何か手助けが出来る人になりたい。
- ・「自分の身は自分で守る」…自分の身を守ることで，自分が助かったあとに周りの人を守ることが出来るから。

5. 評価

(1) 評価の方法(アンケート調査の実施)

①参加児童に対して

ア. 「キャンプはためになったか，どのようなことがためになったか」や「自分が頑張ったこと，できるようになったこと，考えたこと」について，アンケート調査を実施した。

イ. 国立青少年教育振興機構が開発した，「生きる力」の測定・分析ツール「IKR評定用紙(簡易版)」を用いて調査をした。

②保護者に対して

「キャンプの印象について」，「お子さんが自信をつけた，成長したと思うこと」についてアンケート調査を実施した。参加した子ども達に質問紙と封筒を渡し，後日郵送していただいた。

(2) 結果(資料)

①児童アンケートの結果

- ・ 41人中33人の児童がキャンプは「とてもためになった」，7人が「ためになった」と答えた。

- 41人中39人がどの項目についても「とてもためになった」、「ためになった」と回答しており、特に高かった項目は「地震や津波の避難体験の話を聞いた」、「防災ラリーをやってみんなで活動したこと」、「他の学校の人と、友だちになれた」である。

②児童 IKR 調査の結果

「生きる力」及び生きる力を構成する上位概念である「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の全てにおいて、変容が見られた。「生きる力」は10.3ポイントの向上がみられた。

③保護者アンケートの結果

- 周りの様子を見て、自分が何をするのか考え、行動する場面ができました。
- とてもいい経験になったと思います。どんな場面でも、自分で考え、正しく行動することの大切さを学べたと思いました。
- 今回実際に災害にあった人の話を聞き、「次の津波がくれば、死ぬかもしれないと思った」という言葉は、それぞれの心に突き刺さったようで、リアルに体験談を伝えてくれました。
- 身近な防災訓練では得られない、「本当に自分の身に起こったら…」が、今までの防災の意識を変えたようで、私たち親も子どもの話から日々の生活を見直すことができました。

III 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

- (1) 中央防災会議（平成24年3月）では防災教育の目的を『目の前の現実』から確かな情報を獲得し、自ら優先順位を判断し行動できる自立した人間』の育成としている。当交流の家では、それを防災力を備えた人間と捉え、防災力を地震の前、発生中と直後・発生後の三つの時間軸に分け、知識・技術・態度の側面から以下のように整理した。

	地震の発生 前	地震の発生	地震の発生 後
知識	<ul style="list-style-type: none"> 地震が起こるメカニズム 地震によって起こる被害 日頃から備えるコトとモノ 	<ul style="list-style-type: none"> 身を守る方法 避難の方法 	<ul style="list-style-type: none"> 地震が起こったときの人間の心の動き（心理） 情報収集の方法 ストレスに対処する方法
技術	<ul style="list-style-type: none"> 危険を予測し回避する行動 	<ul style="list-style-type: none"> とっさに判断し即座に行動する力 	<ul style="list-style-type: none"> 状況に応じた判断力と行動力 困難な状況の中で生活する技術
態度	<ul style="list-style-type: none"> 互いに助け合う信頼感と態度 	<ul style="list-style-type: none"> 最悪の事態を想定し率先して避難する態度 	<ul style="list-style-type: none"> 互いに助け合う信頼感と態度 冷静な態度 生き抜くという強い意志

- (2) 上記の防災力のうち、今回は「防災に関する基本的な知識や技術」と「適切な避難行動がとれる判断力や行動力」を習得できるように、プログラムを企画した。
- (3) 小学生にとってはプログラム内容が精神・肉体的に負荷が高いことから、募集に際しては、企画意図を理解した上での参加を募ることとした。
- (4) 災害発生後には避難所での生活も予想されるので、避難所生活を疑似体験するプ

- プログラムを企画した。
- (5) 実際に震災を体験した宮城県南三陸町の職員の方を講師に招き、講義・実習を企画した。
 - (6) 地震や避難所での不自由な生活では、様々なことがストレスになるとことから、ストレスの軽減方法について、臨床心理士の方を講師に招き、講義・実習を企画した。
 - (7) 1日目のテーマは「地震に備える」。2日目のテーマは「地震や地震後の生活を体験する」。3日目が「学んだことをまとめる」とキャンプにストーリー性を持たせた。

2. 運営のポイント

- (1) 子ども達のグループ編成については、各学年と男女が均等になるように、また1班を7人で編成した。
- (2) ボランティアスタッフは、子ども達の話し合いや、グループ活動が円滑に進められるように、また1人に負担がかかりすぎないように各グループに2人を配置した。(防災ラリー実施時には、防災ラリーの各ポイントにボランティアを配置するため、グループにボランティアは1人となる。)

3. 成果と課題

(1) 成果

- ① 今回の防災キャンプで疑似体験した煙ハウスや避難所生活は、これからの自分達の生活に現実として起こりうる事態であることを認識するとともに、防災への関心を高めることができた。
- ② 昨年度開発した「防災ラリー」に、災害発生時に必要な判断力や行動力を養うための視点を加え発展させることができた。防災ラリー実施後のふりかえりで、子どもたちからは「真剣に取り組むことで、全てのポイントを回る事ができた」「自分勝手な行動は集団で行動する時によくない」「限られたものを工夫して大切に使う」「ラリーを回る前に作戦会議をすることで、時間を無駄にせず回れた」「教え合うことで課題がクリアできた」「むだがないように考えてから行動することが大切」などの意見が出た。これは防災ラリーを通して、避難や避難所生活の時に必要な判断力・行動力の一部を体験的に学んだ成果といえる。
- ③ 日常生活とは全く違う環境のなかで寝食を共にしたこと、常にグループで話し合いなどの活動を進めたことで、参加した子ども達同士のコミュニケーション力や、人間関係づくりの技能を高めることができた。
- ④ まとめで、これからの日常生活の目標を発表し「家族を守りたい」「リラックスの方法を家族に教えたい」「困っている人がいたら助けたい」などの意見が出ており、キャンプ後にも継続的に防災を考える意識付けができた。

(2) 課題

- ① 防災ラリーは回るポイントが限られていることから、一度に実施できる人数が1グループの人数が6~7人の最大40人程度であることが分かった。今後、受入プログラム等で、40人を越える大人数で行う際には、午前と午後に活動を分けるなどの対応が必要である。
- ② ボランティアリーダーには話し合いの場面では、ファシリテーターの役割を依

頼した。しかし、リーダーによっては、口は出さないものと解釈して、子どもたちの話し合いを傍観しているだけの場面が見受けられた。今後、ボランティアリーダーを依頼する際には、運営側の意図を的確に伝える工夫とスキルを高める練習の機会が必要である。

- ③ 1日目の内容が、講義とグループでの話し合いが中心だった。これに対して、参加児童のアンケートに「1日目が座っている時間が長く辛かった」、ボランティアリーダーのアンケートには「ワークシートが多く、子どもが飽きていた」との意見が複数あった。今後、プログラムを企画する場合には、講義が中心になる場合でも、遊びや息抜きの時間を入れることが考えられる。
- ④ 平成23年度と24年度は小学生を対象として実施をしたが、避難行動のパターンや、避難所での生活の知恵や知識の伝達を行う場合に、中学生や高校生を対象にしたプログラム開発も検討の余地がある。

4. 参考文献

「生死を分ける 災害とつさの判断力」 三雲大 榎出版
「みんなの防災ハンドブック」 草野かおる ディスカヴァー・トゥエンティワン
「人が死なない防災」 片田敏孝 集英社新書
「みんなのPA系ゲーム」 諸澄敏之 杏林書院
「72時間生きぬくための101の方法」 夏緑 童心社
「ファイト新聞」 ファイト新聞社 河出書房新社

担当：長谷川大地 望月奏 望月省吾